

高速増殖炉「もんじゅ」は、何年経っても完成しない

再生不能なエネルギー資源の中で、一番多いのは石炭です。究極埋蔵量がすべて使えるとすると、あと 800 年は大丈夫なほどたくさんあります。石油は経済的に見合う確認埋蔵量だけで 60～70 年の可採年数分あります。他に火力発電の有望な燃料でもある天然ガスもあります。それにひきかえウランは、石油の数分の一、石炭に比べれば数十分の一しかない、実に貧弱な資源です。

原発推進の行政サイドの人たちは、「原発で使おうとしているのはウランではなく、ウランを変換してできるプルトニウムだ」と反論します。どういうことかと言えば、「ウランからプルトニウムを生成し、高速増殖炉という特殊な原子炉を作って、プルトニウムをどんどん増殖していく」ことです。

プルトニウムを再処理しながら、核燃料サイクルでぐるぐる回しながら、エネルギー源にするという構想です。その構想の中心にあるのが高速増殖炉です。1968 年に計画された時には、1980 年代前半に実現するというプランでした。ところがその計画は挫折、今では 2050 年に 1 基目の高速増殖炉を完成させるところまで、計画は大幅に後退しました。

10 年経って目標が 10 年先に逃げるプランは、絶対にたどり着きません。しかし、日本の高速増殖炉計画は、10 年経つと 20 年先に目標が逃げてしまっています。そんな計画は絶対に実現しません。

しかし政府は、「もんじゅ」という高速増殖炉の原型炉だけでも、すでに 1 兆円もの金を捨ててしまいました。「できる、できる」と期待を持たせながら、結局はできないと言うなら、これは詐欺みたいなものです。現在の裁判の判例では、1 億円の詐欺は 1 年の実刑になるそうです。では 1 兆円の詐欺なら？ 懲役 1 万年です。経済産業省や原子力安全委員会などで、「もんじゅ」に関わった人が何人いるかは、私は知りません。しかし、誰も責任をとっていないことだけは明らかです。

政府は、住民を守ろうとしなかった？

発電量 100 万キロワットの原発 1 基が 1 年に燃やすウランは、1 トンです。広島原爆のウランの量が 800 グラムですから大変な量です。ウランを燃やせば、大量の核分裂生成物という放射性物質を作り出します。何かあれば、その放射性物質という毒物が大量に大気中に放出されることになります。

「原発は機械です。機械は時に故障したり事故を起こしたりする。原発は動かしているのは人間で、神ではない。時には誤りを犯す」と私は主張してきました。しかし原発推進派の人たちは、「破局的な事故は起きない。そんなことを想定すること自体がおかしい。破局的事故は想定不相当」と突き放してきたのです。

しかし、事故は起きました。とてつもなく悲惨な、破局的な事故が起きてしまいました。おかげで周辺住民の方は、大変な辛苦を強いられているわけです。政府がもっときちんとした防災対策を講じていれば、住民の被曝をすくなくできた可能性がありますし、不安感もやわらげることができたでしょう。

防災の原則は、「危険を大きめに評価し、あらかじめ対策を講じて住民を守る」ことだと思います。しかし政府のやてきたことは、一貫して事故を過小評価し、楽観的な見通しを公表することでした。事故の規模も当初はレベル 4、そして 5 に上げ、最後によく 7 まで引き上げました。

避難区域にしても、初めは半径 3 キロメートルの住民に非難を指示、さらに 10 キロ、20 キロを範囲を広げていきましたが、これも事故を過小評価したいがためだったのでしょう。このような時は、住民の被曝を防ぐことが最優先されるべき対策です。残念ながら、政府の動きは、住民を守るよりは、ひたすらパニックを恐れていたように見えます。

情報隠しを含め、政府には住民を守ろうとする強い意志があったようには思えません。

しかも、これだけの事故を引き起こしながら、国や東京電力、原子力安全・保安院、原子力委員会、推進派である科学者、真実を伝えない報道など、誰も責任をとらず、住民や最悪の事態を防ぐために被曝覚悟の作業をしている原発作業員に犠牲を強いています。

国家財政が破綻するほどの賠償額になる！

現在進行中の原発事故の本当の被害は、一体どれだけのものになるでしょうか。

もし、日本の法律を厳密に適用すれば、福島県全域といってもいいくらい、広大な土地を放棄しなければならなくなります。それを避けるために住民の被曝限度を引き上げるようなことをすれば、住民たちが被曝を強制されることになってしまいます。どちらにしても苦しい選択です。しかも高度な汚染地域の企業は倒産、農業や酪農、漁業も崩壊、比較的汚染度の低い地域でも、農業や酪農、漁業の生産物が売れなくなるでしょう。そうなれば、それらに従事する人々は生活の糧を得ることができなくなって故郷を去り、生活自体が崩壊することになります。一体、どうすればいいのか、私は途方に迷ってしまいます。

東京電力に賠償をきちんとさせるという意見は政治家にも強いようですが、本当の被害額は、東京電力が何度倒産しても間に合わない規模になります。日本国が破産覚悟の賠償をしても、まかないきれないかもしれません。

事態がそれほど深刻であることを、多くの日本人はいまだに気づいていないように、私には見えます。

ガンジーの墓碑に記されている「七つの大罪」を紹介しておきましょう。

一番はじめは、「理念無き政治」です。それから、「労働無き富」「良心無き快樂」「人格無き知識」「道徳無き商業」、そして「人間性無き科学」。無定見に原発推進の旗を振った原子力研究者だけでなく、私を含めたいわゆるアカデミズムの世界が原子力政策に加担してきたことを、今後、問い続けなければならないと思っています。同時に、東京電力をはじめとする電力会社に、道徳観を失った経営は必ず破綻することを噛みしめ、原発廃絶の決断を下すよう強く求めます。

最後は、「献身無き崇拜」です。信仰心をお持ちの方は、ぜひその教えを实践されることを期待しています。

小出 裕章

2011年5月3日 参議院行政監視委員会に参考人として出席、意見を陳述

(幻冬舎ルネサンス新書 小出裕章「原発はいらない」より)

福島原発では今、何が起きているのか？

そして、想定される未来は……。

私は40年前から原発を廃絶したいと思いながら、結局は力及ばず福島第一原発事故を防ぐことができませんでした。私の歴史は敗北の歴史でしたし、福島第一原発事故は私にとって決定的な敗北でした。それでも、確かに流れが変わってきたように感じます。しかし、油断はできません。原発推進派は今後、生き残りをかけた「総反撃」をしてくるはずですよ。すでにその兆候が、そこかしこに見えはじめています。(中略)

一人ひとりのみなさんが今後、自らの内部からわきあがる思いに従って、それぞれの個性を發揮して行動してくれるなら、日本だけでなく、世界中の原発を廃絶させることができると私は思います。

(あとがきより)